

6. 宍道湖、佐陀川に見られる歴史的風致

1 はじめに

(1) 宍道湖の歴史

「宍道湖」は東西約 15km、南北約 8 km、周囲長約 47km、面積約 79 km²の日本で7番目の大きさの湖である。「シジミ」の産地として有名で、また、朝靄のなかで行われるシジミ漁の風景や夕日の湖面に映える「嫁ヶ島」などの美しい景色を有する湖として全国的に知られている。

宍道湖やその周辺の美しい景色に因んで、古くは江戸時代に宍道湖の名勝を漢詩に詠んだ「松江八景」や和歌に詠んだ「松江十景」があった。これらをもとに昭和の初めに国学者の菟道春千代が「松江八景」を選んで詩に詠んだものは、①千鳥遊園の春色、②床几山の秋月、③嫁ヶ島の白鷗、④袖師ヶ浦の暮雪、⑤白瀉天神の夜雨、⑥宍道湖の夕照、⑦天倫寺の晩鐘、⑧大橋の帰帆である。このように古来愛でられてきた美しい宍道湖の景観が現在の姿になったのは、長い歴史を経たうえのことである。

約 6,000 年前には、西側で日本海に直接通じる湾であった（古宍道湾）。その後、土砂の堆積により西側では日本海とは絶縁したものの、当時は斐伊川が直接日本海へ流れ込んでいたことと、東側の中海を通じた外海の影響が大きかったことにより、約 1,300 年前の『出雲国風土記』（733）には「入海」と表現され、宍道湖にクロダイが、宍道湖の周辺河川にはアユがいたことが記されている。

宍道湖が汽水湖として形成されてきた変化は、平安時代以降の弓ヶ浜の半島化や、中世初期の斐伊川の流路変更による淡水流入量の増加などによるものである。

たたら製鉄が盛んとなる戦国期以後、宍道湖への土砂の流入が進み、しだいに湖の沿岸部周辺に被害を及ぼすようになり、寛永 16 年（1639）の大洪水など、大雨のたびに濁流が流入して増水し甚大な被害を引き起こすようになった。このため、江戸期の松江藩は何らかの対策を講ずる必要に迫られていた。

(2) 佐陀川の歴史 開削と清原太兵衛の功績

このような状況のなか、松江藩松平家 7 代藩主治郷の時代に、宍道湖から日本海に注ぐ人工の河川として天明 7 年（1787）に整備されたのが「佐陀川」である。これは、洪水時に斐伊川から流入する大量の水を、大橋川を経由させずに直接日本海に排出させて松江の町を水害から守るための放水路であった。この佐陀川開削という藩の一大普請事業を中心的に行ったのが「清原太兵衛」である。

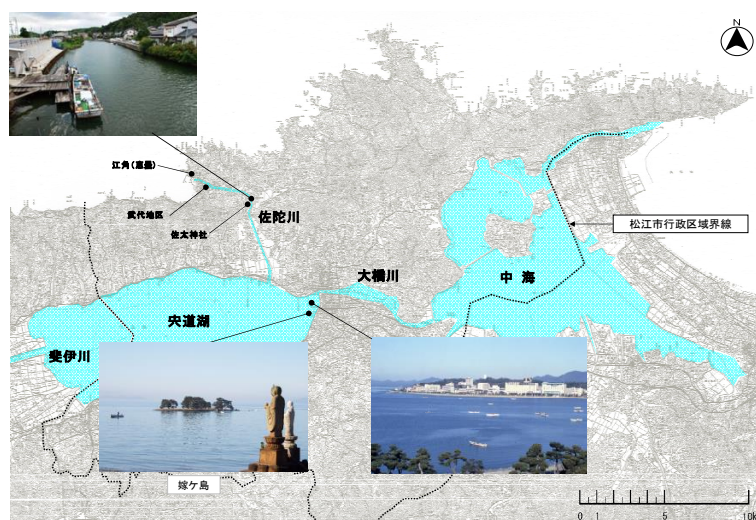
天明5年（1785）、松江藩の普請方吟味役だった太兵衛（当時75歳）は、長年にわたって藩に懇願してきた佐陀川の開削に着手した。しかし、用地が佐太神社領を貫通する計画であったことから土地の収用が難しく、また泥炭の堆積する層は終日の労苦によって掘上げても一夜の内に忽ち崩壊するという難工事で、役夫数人も犠牲となるなど、佐陀川の開削は困難を極めた。それでも、彼の設計と陣頭指揮のもとで、3年の歳月をかけて川幅約36m、全長約12kmの佐陀川が完成した。しかし太兵衛自身は、天明7年（1787）11月、盛大な川開き式の2カ月前に病没している。

この開削工事のあいだ、太兵衛の労苦は並々ならぬものであったが、幾多の難工事に直面しながらもひるむことなく、ひたすら工事を督励するとともに、自らは江角浦において齋戒沐浴（飲食や行動を慎み、水を浴びて心身を清めること）し、佐太神社に日参すること100日に及んだ。また、神社東方にある恵美山より横8尺、縦6尺、高さ5尺の大石を切り出し、佐太神社に手水鉢として寄進していることから、当時の太兵衛の心中を察することができる。

さらに、太兵衛はこの難工事に自らの英知を振り絞って挑み、日本海に近い西側の河口付近（武代地区）では川を蛇行させた。これは、海水が逆流する現象を防ぐ対策であったと考えられており、彼の事前の緻密な調査と英知を裏付けるものである。

この佐陀川開削の成果によって、宍道湖の水位は約1m下がり、沿岸の水害は大いに緩和されることとなった。また、一雨降れば沼地になった地域での新田開発にも拍車が掛かり、これによって開発された新田は200haと伝えられている。さらに宍道湖～江角（恵曇）間の舟運が開かれるなど、地方経済産業の発展にも大きく寄与することとなった。

このように、人工の河川「佐陀川」を開削することによって、宍道湖とその周辺の環境・安全性は大きく改善され、より一層人々の安定的な暮らしや漁業などの活動の場として寄与することとなった。



宍道湖・佐陀川



【佐陀川開削前】寛永出雲国絵図、寛永10(1633)年

潟湖状に描かれた「佐陀口」から「佐陀」、「大明神（佐太神社）」、「水津（御津）」、「布崎」を結ぶ道路（細い朱線）と、嶋根郡と秋鹿郡の郡境（太い朱線）は描かれているが、まだ佐陀川は見られない。



【佐陀川開削後】
出雲国十郡村絵図、寛政年間(1789~1801) 推定

天明7(1787)年に竣工した佐陀川が描かれている。



明治末～大正ごろの佐陀川風景



佐陀川を航行する合同汽船(昭和初期)

※写真は今岡ガクブチ店提供

2 建造物

(1) 嫁ヶ島の石造物

「嫁ヶ島」は、宍道湖に存在する唯一の島であり、東西約 110m、南北約 30m、周囲約 240m の細長い小判型の形状で、1,200 万年前の新第三紀中新世に、火山活動によって噴出した黒色の玄武岩でできた島である。

この島に関する最も古い文献は、『出雲国風土記』(733)があり、そのなかで「蚊島」と記されている。これが「嫁ヶ島」と呼ばれるようになったのは、中世に蚊島から嫁島に表記が変化したことが契機だが、「姑にいじめられた嫁が、耐えかねて里帰りをする途中、凍った湖を急いで渡ろうとして氷が割れ水死してしまった。それを憐んだ水神が島と共に浮かび上がらせた。」という伝説の成立も手伝って「嫁ヶ島」という島名が次第に定着していったと伝えられる。

近世になると、松江藩堀尾家2代藩主忠晴(治世1604～1633)が、宮島の厳島神社から弁財天を勧請して祀ったことから、弁天島とも呼ばれ、神域としても認知されるようになった。現在は、宗教法人竹生島神社の境内地となっている。

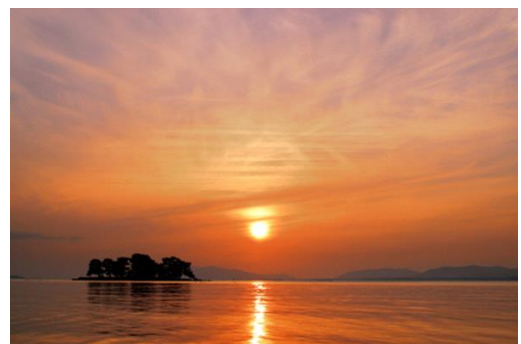
この「嫁ヶ島」が描かれた絵図は多いが、そのなかで最も古いものは、「出雲国松江城絵図」正保年間(1644～1648)国立公文書館蔵(内閣文庫)があり、島の形状のみが描かれている。



「出雲国松江城絵図」正保年間(1644～1648)
今とは違って南北に長く描かれている



鳥居の方角（東側）からのぞむ嫁ヶ島



夕景の嫁ヶ島

①鳥居

島の東端には花崗岩製の鳥居がある。以前は木製だったが腐朽が激しかったため、明治40(1907)年、ここを訪れた京都帝国大学の工学博士田邊朔郎がその状況を見て、現在の鳥居を献納した。高さは2m余りで、製作は、松江一の石工石谷為七である。鳥居の左右の竿の表には、朔郎が詠み第2代松江市長高橋義比が揮毫した漢詩が刻まれ、裏には献納者の氏名と建立の年月日が刻まれている。

向かって右の竿「遶祠春水緑 隅市暮山蒼」裏「工学博士田邊朔郎献納」
向かって左の竿「翠表人帰去 千年對夕陽」裏「明治四十年三月十五日」



嫁ヶ島の東端にある鳥居

②大灯籠

島の中央にある大灯籠は、明治27(1894)年から明治29(1896)年まで島根県主税長を勤めた金子直(造酒蔵)が、千葉県転任後も宍道湖の景色が忘れられずに、明治36(1903)年に献納したものの。久多見石製で、高さは3mある。その独特な意匠は、荒川亀斎、彫刻は石谷為七である。

「清風明月、太白館亀斎」「武蔵国住人金子直建立」「白瀧窟為七造」「明治三十六年」の文字が刻まれている。



嫁ヶ島の中央にある大灯籠

③ 詩碑

大正14(1925)年に地元有志によって建立された詩碑。大正元(1912)年、松江の漢詩結社である剪淞吟社が、著名な漢詩人 永坂石埭を招いて嫁ヶ島に案内したときに詠まれた漢詩「碧雲湖棹歌」10首の内の1首と「大正十四年」の文字が刻まれている。



嫁ヶ島の西側にある詩碑

3 活 動

(1) 宍道湖・佐陀川の漁業

宍道湖は、上述の歴史や変遷をたどりながら今日に至るが、我々にとっての大いなる一面は“豊かな水産資源に恵まれた汽水湖”であり、松江市民の暮らしや営みにおいて極めて重要な存在である。

宍道湖を代表する水産物は、宍道湖七珍と言われるスズキ、モロゲエビ（ヨシエビ）、ウナギ、アマサギ（ワカサギ）、シジミ、コイ、シラウオである。

なかでも、特に有名なのは「シジミ」であり、宍道湖（佐陀川を含む）で獲れるヤマトシジミは全国のシジミ漁獲量の約4割を占めている。

現在の宍道湖の中心部近くの約9,100年前の地層から密集層が発見されているシジミは、西川津遺跡の弥生時代前半の遺跡からも大量に出土しており、古くから宍道湖周辺で獲られていたことが分かっている。宝暦年間(1751～1763)に著された『雲陽大数録』に特産品として取り上げられている「一成（市成）蜆」は、後背地の楽山（御立山）の別名から「御山シジミ」とも言われ、特に大型のものが取れたことから、一般の漁を禁止して藩主だけが食べることができたと伝えられている。

昭和中頃までは主として地産地消が行われていたが、昭和30年代(1955～)以降、全国への出荷が行われ、漁獲量は大幅に増加した。昭和後半(1980年代)から平成初め(1990年代)にかけては年間1万トンを出荷し、更に各地で宍道湖産シジミの稚貝の放流も行われたため、全国のシジミ漁獲量の9割が宍道湖産という時期もあったほどである。

現在では、資源の維持のために年間4,000トン程度に抑えられているが、シジミ漁は宍道湖・佐陀川周辺を舞台に古くからこの地に受け継がれてきた人々の重要な営みであり、このシジミを使ったシジミ汁は出雲地方の食卓には欠か

せない味覚である。早朝から多くの船が「ジョレン」という漁具を使って行うシジミ漁の姿は、まさに水都・松江を代表する風景となっている。



しんじこ
宍道湖のシジミ漁の風景



さだがわ
佐陀川のシジミ漁の風景



シジミ漁で使われる「ジョレ

しんじこしっちん 宍道湖七珍		コイ 	ウナギ 
スズキ 	アマサギ(ワカサギ) 		シジミ(ヤマトシジミ) 
シラウオ 	モロゲエビ(ヨシエビ) 		

(2) 嫁ヶ島の保護活動

「嫁ヶ島」は、古代から存在が知られ、神域としても保護され、ふるさとの景色として、この地に住む人びとだけでなく、多くのここを訪れた人々を魅了し、愛され、保存され続けてきた。

明治期以降、波の浸食から島の消滅を守ろうとする市民たちが、度々盛土を続けてきたと伝えられているが、その努力は、恐らくそれ以前からあったのではないかと推察される。これらの保護活動の延長線上に、明治末から大正期に行われた、現状のような細長い小判型に「如泥石」※を廻らす護岸保護活動があり、島内の草刈りや石造物の保全を通して信仰を守る活動があり、昭和55年(1980)には、建設省による石垣護岸整備と盛土整備が行われ、その後も市民による保護活動の継続があって、現在の島の形状が保全されている。

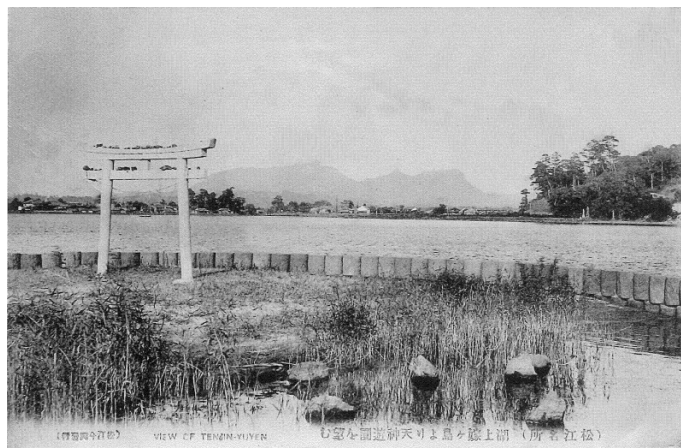
現在の島には、クロマツが27本、エノキが5本、他数本が生育しているが、これは、「嫁に夫がないのは寂しいこと」として、昭和の初めに松江出身の政治家 若槻礼次郎わかつきれいじろうが植樹したのがその始まりである。

島の対岸には、平成19年度（2007）に完成した遊歩道や夕陽観賞テラス「夕日スポット」が設置され、そのための駐車場も整備されている。多くの市民や観光客がここを訪れ、散歩やジョギング、夕日観賞や写真撮影で賑わっている。

また、地元NPOや氏子たちによって、島では年数回の除草作業や、6月の神事まんとうえ（万灯会）や夏に島に渡るイベント、秋に名月観賞と茶会などが行われ、周知活動・保護活動が続けられている。

嫁ヶ島が貴重な文化財であることに加え、これらの積極的な活動が評価され、令和3年3月26日には国の登録記念物（名勝地関係）に登録された。

※如泥石じよでいし：松江藩の工匠 小林如泥こぼやしじよでいが考案したと云われている。もともとは、宍道湖の護岸石として設置されていたが、明治時代以降に置かれ始め、特に大正時代の初めから嫁ヶ島の護岸保護工事として集められ、大規模に設置されていったものである。



大正時代ごろの嫁ヶ島 右側に如泥石じよでいしが少なくとも2段積み上げられていることが確認できる



大正14年(1925)以降の嫁ヶ島 詩碑設置以降の写真。如泥石じよでいしの護岸が高く見える



嫁ヶ島に現在も残る如泥石じょでいし



護岸石として周囲を巡る如泥石じょでいし



市民による清掃活動



NPO団体による活用イベント

4 まとめ

小泉八雲はその著書『知られぬ日本の面影』のなかで、「霞かすみがかつた紫が、上の方へ弱い朱色と鈍い金色になって、次第に煙のように薄らいでいく。それがほのかな緑色の層を経てからしまいに青色に没する。湖の沖の方の水が深いところはやわらかな、何ともいえないすみれ色を帯びる。すると、松におおわれた小島の影法師がそのうるわしい色をした水面に、浮いたように見える。」と宍道湖の色彩・情景を愛着とともに紹介している。

元々は海であったところから始まる湖の長い歴史と、佐陀川開削という先人の労苦と英知を伴いながら、シジミ漁に代表される人々の暮らし・活動の場として保たれてきた宍道湖は、八雲も愛した風景と風情を現在も伝え、我々にとってかけがえのない存在であり、その価値を維持・向上させながら次代に引き継いでいかなければならないものである。

歴史的風致のエリア図

宍道湖、佐陀川に見られる歴史的風致

